



障害をもつ幼児の保育(12)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

手を使う、マトのある子の成長

手や足の機能がマヒして使えないことは、幼い子どもや親たちにとって大変なことです。その中でどのように心も体も成長して行くのでしょうか。

U子が初めて家庭指導グループに来た日のこと

F U子は右手右足にマヒがあり、言葉も出ないとい

うことで幼稚園入園を前に私たちの保育の場に相談にきました。二十年も前のことですがその頃のことは忘れられないこととして、心に残っています。

M そうそう、その日は私が一緒に過ごしたけど、他の子のお弁当のスパゲッティを欲しがって、手づかみで全部食べてしまった。母親が「フォークを持って」

と声をかけました。私は右手を使えないこの子が、左手でスバゲッティを全部食べてしまったことに感心していたんです。フォークを使うのは高度なことだから自分の手で食べていいと思っていました。

F 後でその様子をきいて、この子には自分の思いをなしとげるエネルギーがあると思いました。お弁当の後、手を洗いに行ったら、マヒのある右手も水につけていました。小さな出来事だけれど生きる力が見られ嬉しく思いましたよ。

M 二、三日して再度来たとき、父母が他の先生たちと話をしている間、この子は外の滑り台を下から上に登ろうとしていました。けれども片手片足にマヒがあるので、とても無理に見えませんでした。

F 私が手伝おうとすると父親が来て、「自分でやらせて下さい」と言ったんです。無理なので、なおも手伝おうとすると、重ねてきっぱりと「自分のことは自分でやるようにしたい」と言われました。そのときあな

たが手を差し出して、U子の手をとって階段の方に行ってくれました。

M U子はそのとき、滑り台を下から上りたかったです。私はそれが分かったから、U子の使える左手をひいて階段を上り、ひとりでは無理だから滑り台と一緒に滑りました。二人で滑り降りてくると、U子は全体で笑っていました。母が「さっ、帰りましょう」と言ったらギョーって怒ったのには、この子の思いが感じられて、また手をつないで階段の方に行つてすべったんです。父母は一回だけね、といったけど結局何回も滑つて満足して、納得して帰って行きました。

U子がこんなに落ち着いていたのは初めて

F この日U子と父母たちが来たのはこのグループに入るのを断りに来たのだったんですね。私はそんなことは知らないでU子との遊びを楽しんだり、助けたりしていたんです。

本当に楽しく遊んで家に帰ったら、こんなにU子が落ち着いて機嫌が良かったのは初めてだったので、やめようと思ったけれどやっぱり、とりあえずここに入れることにしたんですって。

M U子の父親も母親も初めての子で、U子をどう育てたらいいのかわからなかったのでしょう。普通の子どもの中に入れて、早くまねして言葉とか行動が普通になるように、焦る気持ちがあったのでしょうか。これはだれにでもあることだと思ふ。でもこの人たちが偉いところはU子の様子を見て、こんなに幸せそうで落ち着いていたことはなかったから、ということをお断りの基準にしたことだと思ふ。

F 本当にそのことが、後のちまでもU子の成長を助けたと思います。この日の両親の決断が、これから二十年も続く私共とこの家庭とのお付き合いとなりました。この親子から、私共はどんなに多くを学んだかわかりません。

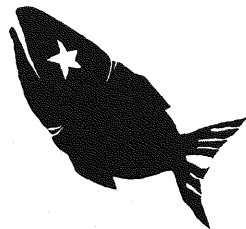
自分の出来ないことに助けをもとめる

F U子のことをいつも親切に見守ってくれている実習生がありました。

U子と実習生のYさんと

のやりとりは体を使って抱いたり助けたり、心の通いがわきで見ているものにも伝わりました。

あるとき、庭でU子が台車を見つけて乗ったので、Yさんが押して部屋に入るとU子が台車から降りて、自分でどうにかして部屋に入れようと思いました。入り口の敷居を越えようとして、いろいろ工夫しましたが、しばらくしてそばで見ていたYさんの方に助けを求めるように「アッ」といいました。それからYさんに助けってもらって車を出したり入れたりして、長い時間遊びました。自分では出来ないことを、あきらめ



しまわずに、親しい人に助けてもらおうことは柔軟な自我と人に対する信頼が育っていたからでしょう。

M そうそう、裏庭にあったタイヤをロープでつるしたブランコに乗れるようになったのも、はじめは大人に手助けしてもらってやつとタイヤの穴に座るが、うまくいかない。偶然手が滑って反対のロープにつかまったら、自分で漕げるようになって、本当に楽しそうに乗っていましたよ。

誰でも新しいことができるようになるのは、嬉しいことですが、言葉で表現出来ないこの子が風に髪をなびかせて、いい表情を見せるのは嬉しいことですね。

このとき一緒にいて、U子さんを見ていたYさんも緊張感がなく、互いに見つめ合っていたことは忘れられません。

自分の中にあるやりたい気持ちに動かされて

F 私たちのグループに乘始めたころ、他の子どもが

遊んでいるプラスチックのレールを見ると、他の子にはおかまいなしにひとつひとつ外していました。マヒのある右腕にレールをはさんで、左手でばきつと折り、感触を確かめるように右手の甲でなでるのです。

後になって、小さいプラスチックの輪に興味をもって集めたときも、左手だけでは無理なのでマヒのある右手を補助にして集めることをやっていました。

M 自分の中にあるやりたい気持ちに突き動かされてやったのだけれど、それを見ていて喜んだり感心したりしてくれる人がいることが、子どもの心のはずみになるのでしょうか。

ここでは、特別な訓練はなにもしていない。物をバラバラにしたり、集めたりする行動は幼児期にはどの子もやることですね。U子さんも興味を持って手にとったり、バラバラにしたりする。散らかるからと止めたりすることはほとんどないです。やりたい気持ち

が大事なんです。

F プラスチックの輪を集め終わったとき、そんなU子さんの様子を見守っていたYさんの方にしっかりと目を向けて、膝に飛び乗ってきたということを聞ききました。マヒした機能を拓くのは、その子どもの持つ生命力と好奇心に加えて、人に支えられる喜びかと思えました。

M この頃、私が驚いたことがありました。U子は三輪車置き場の中をいろいろと探していたんです。その中から一番大きい三輪車を選んで、私にそれを出してくれと言うんです。そんな大きなのは無理だろうと思っただんですが、出してあげると、今度はそれにまたがせてくれと要求しました。サドルにまたがせてあげると、ハンドルを両手で握るんです。右手はもちろん添えるだけなんです。私は右手も使っているのに驚きました。

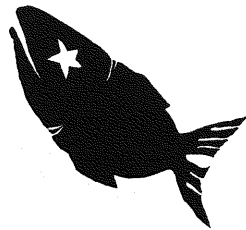
子どもを縛っていた桙が取り払われたとき

F 親たちは、このグループにはとりあえず入っただけで、いつやめようかと思っていた、と

後に聞きましたがそんなこととは知らないで、U子はのびのびと自分を表現し始めました。お弁当のときお茶のポットからお茶をこぼしたり、手で食べたりしました。

M 一番困ったのはトイレでおしっこをしないで、そのへんでしたことだね。

F トイレで出来ないことよりも、母親はしっかりとつけたのに、どうしてトイレでしなくなつたの、と嘆いたことです。そのうちお母さんがお迎えに来たときとか、見学のお客さんが見えたときとかに、わざとす



ることに気づきました。

これはU子さんの、人との関わりかたの初期だったと思います。そんなとき、良く笑ってふざけるようなからかうような表情をしました。

M この子どもに生きるエネルギーがあると思っていました。しつけられて出来るようになったことを、もう一度自分のやり方でやり直すのでしょうか。本当に納得することによって自分自身の存在を肯定するのだからと思います。

F 障碍児について、どこが悪い、何が出来ない、などと問題点を探す人が多い。それを直すと『普通』になると考える人もいますね。でもU子さんはU子さんらしく生きるようにすることが、もつとだいなことでしょうか。いま言われたように生きるエネルギーがあることは、まず一番にこの子の持つ宝だと思います。このエネルギーが、出来ないことを乗り越えるのにとても力になったことです。

U子さんのお母さんが「ここでは障碍にたいして何かをするというより、普通の子どもにも必要なことをするんですね」と言われたことは私たちの教育のありかたを理解してくれたことでしょうか。

機能訓練のこと

このときからしばらく後のことでした。病院に行つたとき、麻痺と精神状態とは深く結び付いている、たとえば、ちょっと音がしてもそつちに走つて行つたり、この子は多動でしょうと言われたそうです。母親は、それはこの子が多くの興味を持っているからだと思つていたのに、そうだったのかと思つた。そういう観点から機能訓練が必要だと言われ、親としては本当にそうなのかと疑問に思ふ気持ちと、いまのうちに訓練しなければ手遅れになるという気持ちと両方があった。

一回三十分くらいの訓練だが、泣いていやがった。

強制的に連れて行かねばならなくてこんなことをしていいのだろうかと思つたと話されました。私はこの子の全体の様子から考えて、これだけの意欲を生かすならばきつと自分で手を使う練習をしていくに違いない、人間にはそれだけの力が備わっていることを確信して、そのように話しました。

成長の前に立ちはだかる壁との葛藤

F U子さんは右手右足が不自由だったことによつて、物とかかわるときに不便がありました。自分で工夫して何とかそれを克服していききましたね。それでも、人との関係では髪の毛を引っ張ったり、人を噛んだりすることが出て来ましたね。このことはどう考えていきましたか。

M そのときは大人が、他の子を傷つけないように気を使って、U子さんが今成長のために、新しい自分になるために自分の前に立ちはだかつて壁と戦つて

いるところが見えなくなつてしまふんですね。右手がきかないから、この子は口を使つて人を噛んでしまうのに。

F どんな子どもでも成長の前には、葛藤があるけれど特別厚い壁を破つて成長して行くU子のような子は、本当に見事な葛藤と成長がありますね。そこを見られるかどうか。

M そのことを助けたのはU子自身が他人とかかわろうとするエネルギーを豊かにもつていたことでしょう。ひとりの男の子どもがソファに長々と寝そべっているのを見るとU子が近づいていきました。その子がU子の方をみると、U子は身体をちよつとねじつて身



をかわし、その子の頭の方に回りました。ゲラゲラ笑いながら、近づいてはちよつと逃げる動作を繰り返しました。その子をかからかうような、ふざけっこをたのしんでいるような様子でした。それに似たことが毎日のように起こりました。相互性の力ですね。そのことが他人に理解されなくて、その頃同時に通っていた普通の幼稚園の親子のなかで問題を引き起こしたこともありました。

U子の成長の姿が、本人だけでなく、他の子どもたちも大人たちをも変えていった

F 保育者も、親たちも、一人の子どもの投げかける問題によって考え方が広がって、問題を起こさないようにというのではなく、この子がどのように成長していくのか、考えるチャンスになるのでしょうか。

U子は言葉は話せないけれど、人とかわかることに関心があったのでしよう。下駄箱にあるお母さんたち

の靴やサンダルをいろいろ取り出して、履いてみてましたね。どの靴が誰のかちゃんと分かっていた。そんな遊びは、今思うと人に対する関心だったでしょうし、ハイヒールが大好きだったのは、素敵であることに憧れていたのかもしれませんが。

M たとえ心身のある部分に障害があっても、その部分にだけ注目して治そうとすると成長が不自然になります。いつも人間としての全体を視野に入れて保育することが大切なことが分かります。ことに幼児期には。大人になるまでの長い年月を見たときに、つくづくそう思います。